

Museum News

秋田県立博物館ニュース



ミュージアム・クイズ

上の写真は、当館考古部門の収蔵資料です。さて、これはいったい何でしょう？

(答えと解説は5頁下段にあります。)



目次

表紙・目次	P.1
企画展・特別展紹介	
(報告) 企画展「博物館の挑戦状」	P.2
(紹介) 企画展「新着・収蔵資料展」	P.3
(報告) 企画コーナー展「理紀之助と貞直」	P.4
資料紹介	
(考古部門) 「若林勝邦氏名刺」	P.5
(考古部門) 「カセキのあるセッキ」	P.5
学芸ノート	
(工芸部門) 「あけびづる細工」	P.6
(真澄部門) 「真澄研究の『秀超』『超』の登場」	P.7
平成28年度展示予定	P.8

平成27年7月25日(土)～8月23日(日)

企画展 博物館の挑戦状

－秋田現代史への招待－

この展示では、昭和30～40年代、国策として推し進められた「高度経済成長政策」により、秋田県民の暮らしがどのように変化したのか？という視点をもとに、人々のまわりにあふれるように出た生活雑貨品を展示しました。タイトルの「挑戦状」とは、展示品に関する問題を25問出題していることからつけました。

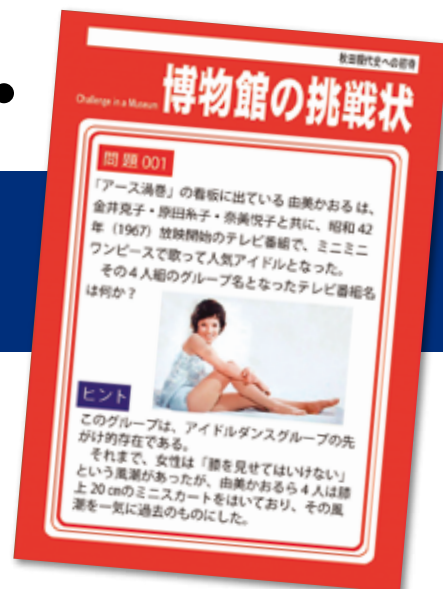
観覧者総数、20,432人を唸らせた展示を、紙上で紹介します。

展示構成と展示品

① 時代を超えて－ホーロー看板の小径－

観覧者を昭和の世界にいざなうコーナー。壁面には、昭和30～40年代の県内各地の写真、頭上には懐かしいホーロー看板を展示しました。

またガラスケースには、昭和のスター、アイドルのレコード、ポスター、色紙、写真を展示しました。



② 懐かし農村の日常

農業が機械化する前に使われていた農具、昭和30年代まで使われた生活用品、その頃始まった貸衣装の婚礼衣装などを展示しました。



③ 花あふれる生活

昭和40年代になると、農業の機械化、自家用車の所有、家電製品の普及、食事の洋風化が進みました。このコーナーでは、ホンダS600を筆頭に、当時発売された洋食器、裁縫道具、化粧品を展示しました。



④ 模型少年の日々

このコーナーでは、昭和30～40年代生まれの少年を魅了したプラモデル1,500点(当時発売されていたものばかり、しかも未使用品)を集め、模型屋を復元しました。男性観覧者が熱心に見入っている姿が印象的でした。

⑤ 人形遊びの午後

昭和40年代に女の子の間で広まった着せ替え人形バービー、リカちゃん、ジェニーを約80体並べました。特に初期型リカちゃんは「あのとき欲しかった…」という切ない少女時代の記憶を呼び覚ますものとして、多くの女性観覧者のハートを揺さぶりました。また、当時の「子ども部屋」(女の子)を復元しました。

⑥ 男泣き家電ランドDX

昭和40年代、男たちが熱中したラジカセ、オーディオ等の娯楽家電、フィルムカメラを展示しました。



⑦ THE応接間

たまのれんをくぐると、そこにはソファ、テーブル、大きなステレオ、8トラのカラオケ、そして北海道土産の木彫りの熊と修学旅行の土産で買ってきた東京タワーが置いてあるという、アンバランス感満点の懐かしい応接間が観覧者を迎えました。ここに座ると、それぞれの昭和史に思いを馳せることができました。(歴史部門 畑中康博)

展示紹介

平成27年11月14日(土)～平成28年4月3日(日)

企画展 新着・収蔵資料展

未見！ 発見！秋田県！



当館では数年に一度、「新着・収蔵資料展」と称し、普段は紹介できない資料や、最新の研究成果などを紹介する機会を設けています。今回は8部門による11のコーナー展示を行ったほか、日ごろ資料整理に尽力されているボランティアの活動についても紹介しました。

見慣れた野菜が実は・・・



〔生物〕 「帰化植物標本～外来種侵入の確かな証拠～」より

人間の活動によって外国から持ち込まれ、野生化した植物を「帰化植物」といいます。日本の植物約4,000種のうち、1,200種以上は帰化植物といわれており、その数は増えつつあるようです。

普段サラダやおひたしにして食べるクレソンですが、野生化して田んぼや水辺に自生し、生態系を脅かすやっかいな存在にもなっています。

◆各部門展示

- 〔地質〕 化石が語る昔の秋田
～秋田の化石の魅力を発見！～
- 〔生物〕 産地直送秋田屋水産
帰化植物標本
～外来種侵入の確かな証拠～
- 〔考古〕 新知見、石器石材研究の最前線
私たちはなぜ「縄文」に惹かれるのか
～縄文時代と現代～
- 〔歴史〕 県博鉄道コレクション
- 〔民俗〕 秋田の土人形大集合！
嫁ぐということ
- 〔工芸〕 あけび細工～中川原十郎のわざと美～
- 〔先覚〕 島田五空・多田等観の新着収蔵品
- 〔真澄〕 近泰知著『植田の話』と真澄

◆ボランティア活動の紹介

- 〔生物〕 植物標本ボランティアの活動
- 〔考古〕 考古学ボランティアの活動
～収蔵資料のクリーニング～
- 〔歴史〕 古文書整理の醍醐味

ほほえましい子どもの遊びですが・・・



〔真澄〕「近泰知著『植田の話』と真澄」より

『植田の話』は、明治時代の横手市十字町植田での風俗習慣を記録したものです。上図は子どもが集まって「何ゴ読み」という遊びをしている場面です。それぞれ小石か煎豆を握っており、その数の合計を当てるものですが、横にいるお姉さんが「捕まるよ」と言っています。よく見ると、「何ゴ読み」の横に「博奕」と書かれています。

鉄道資料なのに包丁！？



〔歴史〕「県博鉄道コレクション」より

鉄道なのに、包丁？と思われた方もいらっしゃると思います。この包丁は国鉄土崎工場に勤務していた方が退職される際、部下の方から記念として贈られたものです。鉄道の部品を溶かして特別に作られたもので、軽くて切れ味が抜群でした。この包丁は、国鉄職員からの、家族みんなの幸せを願った心温まる贈り物といえます。（展示・資料班 丸谷仁美）

平成27年9月26日(土)～11月29日(日)

秋田の先覚記念室 企画コーナー展

理紀之助と貞直

―農聖の底に流れるもの―

展示構成

1. 理紀之助と貞直
2. 祖父喜一郎と菅江真澄
3. 蓮阿上人と後藤逸女
4. 高橋正作
5. 草木谷で
6. 谷頭
7. 歌友との交流
8. 底に流れるもの

平成27年は石川理紀之助の生誕170年、没後100年にあたります。秋田の先覚記念室では、平成27年9月26日から11月29日まで石川理紀之助の企画コーナー展を実施しました。

石川理紀之助（秋田市出身、1845～1915）は、貧しい農村を救うために生涯をささげ、農聖として人々の尊敬を集める一方、貞直という号をもつ歌人として、多くの和歌を詠んだといわれます。本展ではこの歌人・貞直としての一面を、生涯をたどりながら紹介しました。

理紀之助は、「寝ていて人を起こすこと勿れ」「天地の御恵み忘るべからず」などといった訓言を数多く残しているため、理紀之助が詠む和歌にも、教訓的な要素を感じる方が多いかもしれません。確かに「磨く

その力によりて瓦とも玉ともなるは心なりけり（磨こうとするその力によって捨てられる瓦になるのも宝石となって光るのも心であるよ）」などのような和歌もあります。しかし、実際はそのような和歌はほんの一部なのです。

昭和8年発行の『石川翁講演全集』に収録されている言葉をみてみると、

- ・「和歌はわづかに一首三十一文字に過ぎざれども、作者其の人の心の得の表現なれば、」
 - ・「和歌を詠むは決して難きことに非ず。見るにつけ、聞くにつけ、折りにふれ、感にうたるにつれて、景物にふれて、心情を詠む、即ち歌なり。」
 - ・「我が作れる我が歌なり。我れ死したる後もなほ滅ばせず。我れ和歌を作れば、和歌我れを存するなり。」
- これらから、理紀之助が和歌を心の発露であり、自らの存在の証であるにとらえていたことがわかります。

理紀之助は、秋田藩の3歌人と言われた蓮阿のもとに弟子入りし貞直の号をもらいます。蓮阿の死後は、東京の加藤千浪の弟子となって、県内外の歌人との交流を深めていき、千浪の門人の中島歌子、伊東祐命など中央の一流の歌人を知るようになりました。中島歌子は樋口一葉の和歌の師匠でもあり、歌子の兄弟子にあたる伊東祐命は宮内省御歌所の首座を務めた人物です。また祐命を通じて、御歌所の所長高崎正風とも関わりを持ちます。このようにして、自身の心を表現する術を高めようとしていました。

理紀之助が、良い和歌とはどのようなものかを問うと、高崎は理紀之助の著作『ゆめのあと』の和歌をあげました。明治20年、長男民之助が家出をし行方不明になり、それを探し求めて旅立った理紀之助が、国後島で亡くなったわが子の遺骨を抱いて帰ってくるという事件がありました。『ゆめのあと』は民之助を探す理紀之助の旅の様子とその心情が描かれた著作です。

「いづこにか旅にある子のやどるらん初雪ふりて寒きこの夜を」

「なげけばや世になきかげも目にみえて声なき声も耳に聞こゆる」

理紀之助の心情にふれることのできるのが和歌です。

これからも、多くの皆さんに味わってほしいと思います。

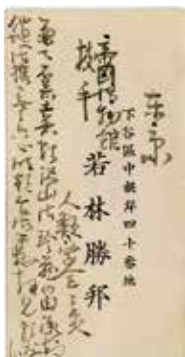
(先覚部門 浅利絵里子)



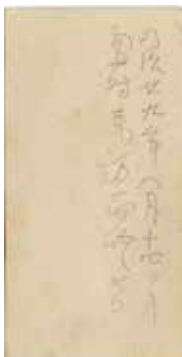
若林勝邦氏名刺

(小林運平氏コレクションより) ～「メタ考古学」への誘い^{いざな}

(表)



(裏)



考古部門といいながら、今回紹介するのは文字史料です。これは平成27年度企画展「新着・収蔵資料展」の考古部門コーナーで展示した小林運平氏コレクションの一部です。

小林氏は、平成26年（2014）3月をもって107年の歴史に幕を閉じた北海道小樽聾学校（小樽市）を創始した人物です。秋田県ではほとんど知られていませんが、氏は秋田県大館市生まれで、明治15年（1882）秋田師範学校卒業後から北海道に渡る明治29年（1896）まで秋田県北部で小学校教員として勤めていました。そして、全く知られていませんでしたが、その当時、縄文時代を中心とする遺跡・遺物の探索、収集を趣味としていました。この度、故あってそのコレクションを当館が受贈したのです。

名刺は若林勝邦氏から小林氏に渡されたものです。若林氏は日本の人類学・考古学の草創期を支えた人物です。名刺には若林の名とその住所が印刷され、表面には若林氏による手書きの文字が書き加えられています。まず、右側から「東京」「帝国博物館技手」「人類学会会員」と読めます。当時、若林氏は帝国博物館歴史部（現・東京国立博物館）に所属していました。そして、左縁には「兼テ石器土器数沢山御珍藏の由承知他地へ御携二無之候ハバ明朝乍御手数拝見願度候」と記されています。「（小林氏）がお持ちになっている貴重な石器・土器を是非拝見したい。明朝会えないだろうか。」という趣旨の文言です。果たして、裏面には小林氏の鉛筆書きの文字で「明治廿九年八月十四日午前七時来訪面語セリ」とあります。明治29年（1896）8月14日早朝、二人は面会し、石器・土器を広げながら語り合ったようです。

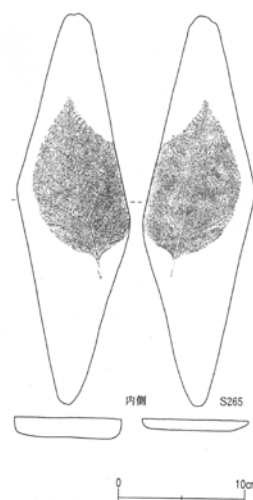
若林氏は亀ヶ岡遺跡（青森県）をはじめ東北地方の遺跡を精力的に調査していました。しかし、交通手段が未発達の時、その探究活動は困難を極めたと思われます。一方で、「中央」で近代的な学問として考古学が産声を上げた19世紀後半、全国的に各「地方」においては地域研究熱が高まっていました。地方における担い手の多くは学校教員や生徒でした。考古資料は教育の場でも活用がはかられました。

今回取り上げた名刺は、この明治後期の「中央」と「地方」、二つの潮流の出会いを具現化しているものと読み解くことが出来ます。なお、考古学をとりまく時代状況や社会心理等を考察することを、最近、格好良く(?)「メタ考古学」と呼んでいます。このように、考古展示の背景にあるものを意識することにより、来館者の方には一層深い「メタ観覧」をしていただけるのではないのでしょうか。（考古部門：伊藤 真）

カセキのあるセッキ

(秋田県能代市採集)

本紙表紙を飾っている資料は当館所蔵品です。地質部門の学芸職員にこの資料名は何かとたずねたところ、「魚化石」もしくは「魚の印象化石のある頁岩」とのことでした。日本海形成時に海底にたまった泥と魚の遺骸が岩石化・化石化したものです。しかし、考古学的にはこの資料は「半円状扁平打製石器」と呼んでいます。用途は定かではありませんが、縄文時代前期（今から約6,000年前～5,000年前）の東北地方北部に多く見られる石器で、平べったい石を半円状に加工して、弧状と直線状の縁辺を作り出します。直線状の縁辺は、表裏面から剥離を施して、刃付けを行っているようです。そうした石器の表面に魚の化石があったのです。縄文人が気づかないわけはないと思うのですが、どうでしょうか？じつは、東北地方の石器の材料によく使われる珪質頁岩は、地質学的には化石を多く含む岩石として有名です。そして、時折、化石付きの珪質頁岩製石器が見られるのです。右の写真は、にかほ市ヲフキ遺跡から出土した縄文時代の石製品ですが、葉っぱの化石がついています。当時の人々は、これらの化石をどのような目で見ていたのでしょうか。（考古部門：吉川耕太郎）



旧仙南村に伝わる伝統の技術 ～あけびづる細工～

美しい網目と繊細な手仕事の技が目を引くあけびづる細工。美郷町（旧仙南村野際地区）にむかしから伝わる伝統の技術がここにあります。

当館には、奥羽山脈の麓、旧仙南村野際出身の中川原十郎が製作したあけびづる細工が11点収蔵されています。丁寧に編まれ、造形的な美しさと力強さを兼ね備えた作品は、半世紀近く経った今も色あせることなく、むしろ更に艶が増し、熟成された味わいと存在感を醸し出しています。

作品の種類も豊富で、手かご、果物かご、こびんかご、丸かご、背負いかご、状さし、びんかご、さげコダシの8種類にわたります。形はそれぞれ違うのですが、編み方はすべて同一、底はござ編み、胴体の部分はこだし編み、縁は矢筈巻きで作られているのが特徴です。あけびの丈夫な性質を活かして、重いものにも耐えうる、物を入れて持ち運ぶための製品を多く製作していることが見てとれます。素材は、地元の奥羽山脈に自生したミツバアケビのつるのみ、それを型などは使わず、職人の腕一本で作品へと昇華させます。

かつて職人たちは日用品に限定して、例えばコダシやびんかご、背負いかごなどをあけびづる細工で製作していました。しかし十郎と、現在十郎の跡をついでいる息子の中川原信一氏は、状さしや果物かご、手かご、花かごなど、日用品としてではなく、生活に彩りをそえ、心豊かにしてくれる作品も数多く手掛けています。そこには、現代の生活スタイルの変化に応じて、あけびづる細工に新しい魅力や付加価値を見出そうとする親子の工夫が見られます。それは新しいものを生み出すことによって後世に伝統の技術を伝える、ひとつの方法といえます。

旧仙南村のあけびづる細工は、もともと人々が地元の素材を使い、土地の暮らしに沿ったものを、知恵と経験で生み出してきたものでした。時を経て、現代を生きる中川原氏の作り出すあけびづる細工は、風土と素材と技術そして職人の創意工夫が融合した編組品に進化したといえます。

旧仙南村の伝統技術を受け継ぐ、ただ一人となった信一氏。「自然の恵みに感謝し、使う人の気持ちにたって、丁寧に心を込めて作るだけ。」その言葉と作品からは、自然と人とモノ、3者がうまく調和した温かな関係を見ることができののです。
(工芸部門：斉藤 洋子)

中川原十郎製作
手かご



底：ござ編み



縁：矢筈巻き



胴：こだし編み



材料のミツバアケビ



中川原信一氏
製作風景

真澄研究への「秀超」「超」の登場

菅江真澄をめぐる現在の研究では、「秀超」と「超」が、真澄の若い時分の名乗であったことが知られています。

菅江真澄資料センター常設展示室には、軸装の「般室記」（超の署名）並びに「市隠亭記」（秀超の署名）が展示されており、その筆跡を見ても上記のことは確実なことと言えます。なお、展示物の原資料は現在、岡崎市美術博物館（愛知県）の所蔵となっています。

秋田県でよく知られていた「菅江真澄」と、愛知県所在の資料に記された「超」「秀超」が結び付くには、次のような経緯がありました。

昭和42年（1967）3月16日付で、秋田市に住む真澄研究の内田武志のもとに、一通の手紙が届きました。愛知県西枇杷島町（現清須市）に住む水谷源二郎という人物からの手紙です。

この手紙には、名古屋の文人画家であった丹羽嘉言（1742～86）の著書『謝庵遺稿』に出てくる「白井秀超」、並びに、水谷家蔵の「湖東游記」「胆吹遊草」（『江山清楽』にある文章）に出てくる「秀超」が、白井秀雄のちの菅江真澄ではないかとの指摘が書かれていました。

手紙の実際は、『菅江真澄全集』別巻一（未来社、昭和52年刊）の第四章にほぼ全文が引用紹介されています。当館の内田文庫ではその実物を所蔵し、今年度の企画コーナー展「内田文庫の貴重資料」で紹介しました。

水谷源二郎からの指摘と論証は、上記の点以外にもあります。それらは詳細でしかも論理的です。内田武志への来信後すぐに、岡崎市の地方史研究者が水谷に面会し、その人物像がはっきりしていきます。水谷は、「篤学者」の称がふさわしいほど、書物渉獵の人物でした。水谷はその後も、内田武志と妹ハチに対して、いくつかの資料の情報を提供しており、内田文庫には現在、8通の手紙と2通のハガキが残されています。

「安永九年五月、丹羽嘉言は、三河の人白井秀超外二名と共に伊吹山から竹生島へかけて採葉を名目とする遊覧旅行を試みて居る」（手紙の文言）。先の水谷の手紙で紹介された『江山清楽』は、そのことを記した文章でした。同じ内容が、「湖東游記」は漢文で、「胆吹遊草」は和文で書かれ、それが『江山清楽』と名づけられたのです。

特に和文の「胆吹遊草」は、白井超（「白生」とも呼称する）の文章を参考にして嘉言が書いたと、その文言から読み取ることができます。一方、文中にある13首の詠歌が超のものです。内田武志

に至っては、この和文は真澄が書いたものであろうと考えるほど、のちの真澄の文章を彷彿とさせます。

水谷からの教示を受け、秋田大学教育学部の教官でもあった内田ハチは、「菅江真澄に見られる科学的記録—その四 伊吹山採葉のこと—」（昭和43年2月）で、「胆吹遊草」と真澄の著作との関連性を考察し、「胆吹遊草」にある白井超が真澄であることを文章上から論証しました。

水谷からの情報は、内田兄妹を通じて、岡崎地方史研究会員をはじめとする愛知県内の真澄に興味を持つ人たちにも伝えられていました。

折から、昭和45年に発行された『菅江真澄のふるさと』では、内田武志の依頼を受けて水谷に面会し直接に感化を受けた浅井敏によって、白井秀超と超などの名乗が、真澄の年譜上に位置づけられました（「幻の故郷を尋ねて」）。こうして、三河や尾張における真澄の足跡に大きな関心が持たれるようになったのです。

このような状況の中、昭和49年3月、真澄が「一たびまなびのおや」とした植田義方、さらに岡崎の塩問屋・国分家にかかわる資料調査から、仲彰一が、超の署名と、文中に秀超の名がある「般室記」「石居記」を発見しました。

内田武志が「真澄の直筆になるものである」ことを確認したといえますので、筆跡から秀超・超が真澄と同一人物であることが確実になってきました。また、丹羽嘉言の『謝庵遺稿』に漢文で書かれた「般室記」「石居記」があることから、国分家と嘉言、さらには植田義方との関係が、にわかに取り沙汰されるようになりました。

続く昭和50年（1975）、国分家の資料整理をしていた新行和子が、超の署名がある「市隠亭記」を発見しました。

これらは、いずれもすぐに岡崎地方史研究会が編集する「岡崎市郷土館報」で報告されています。

水谷源二郎の内田武志宛昭和42年3月16日付の手紙に端を発して、真澄の若い時分の名乗に「秀超」「超」があること、丹羽嘉言をはじめとする名古屋や岡崎の文人たちと真澄が交流を持っていたことが次第に明らかになってきたのです。

内田文庫にある手紙の遣り取りを見ていると、内田兄妹と研究者たちとの真摯な資料探究のもとに、現在の真澄研究があることを知ることができます。資料の発見経緯、考察の推移を含めて、文献や資料を丹念に読み込んでいくことが、いかに大事であることがわかりました。

（菅江真澄資料センター担当：松山 修）

平成28年度 展示予定

企画展

博物館の舞台裏で

4月23日(土)～6月19日(日)

企画展

秋田の昆虫

7月16日(土)～8月28日(日)

特別展

発掘された日本列島2016

2015年度に特に注目された出土品を中心とした文化庁の巡回展です。2016年度は東北・北海道では秋田県だけで開催されます。あわせて、秋田県内の出土品も展示します。

9月22日(木・祝)～10月30日(日)

企画展

四季のたのしみ

11月19日(土)～4月2日(日)

くらしのいろどり

菅江真澄資料センター

企画コーナー展

●菅江真澄のふるさと

●真澄クイズに挑戦

●《水の面影》探訪

7月16日(土)～ 8月28日(日)

10月22日(土)～12月18日(日)

^{H29}3月18日(土)～ 5月14日(日)

秋田の先覚記念室

企画コーナー展

子どもに伝えたい

秋田の先人

9月24日(土)～11月27日(日)

ふるさとまつり広場

●鹿島流し

●七夕絵どうろう

●秋田の手仕事 ～箕と六郷ざる～

●秋田の凧

●「おいしい」をいろどる秋田のやきもの

●ひな人形・押し絵

4月12日(火)～ 6月12日(日)

6月14日(火)～ 8月21日(日)

9月13日(火)～10月30日(日)

11月 1日(火)～12月25日(日)

12月27日(火)～ ^{H29}2月19日(日)

^{H29}2月25日(土)～ 4月 4日(火)

ロビー展示

●楽しいしぼり染め作品展

7月23日(土)～ 8月21日(日)

博物館教室「ゼロからはじめるワラ仕事」で使っている
テキストをホームページからダウンロードできます。

今年度から高解像度版もご用意いたしましたので、ぜひ
ご活用ください！

